

平成26年1月23日(木)午後、市内中央区谷町2丁目にあるNSビル4階の会議室で始まった研修会は、会員をはじめ、バラに興味のある多くの方々の参加で盛り上がりしました。

講師は、整備については当センター専務理事繁村誠人氏、管理については当センター理事の辻正信氏。計画地は当初、ハイカラなサンクンガーデンであったが、海岸線埋め立てから松も少なく、当時の設計者の了解の上バラ園に決定した。その背景、整備コンセプト等について、繁村氏は当事者として関与した体験をもとにわかりやすく解説され、参加者一同、納得した次第です。全体を庭園風に構成された思い、造成の工夫などは、特に興味深いお話でした。また、萩葉樹徳先生と繁村さんの当時のやりとりに、感心したものです。

現在指定管理者として日々バラ庭園にかかわっておられる辻氏からは、まず、世界的なバラ管理の環境配慮の現状について報告があり、無農業に近い取り組みの実情に目を奪われました。次いで、バラの病虫害駆除のあれこれ、病虫害に強い品種改良の現状と苗木の入手困難さ、耐寒性・耐暑性改良の工夫など、初めて聞く話に聴衆は最後まで引き込まれてしまいました。単に指定管理者として管理運営を担当するという立場以上に、バラを愛し、バラ庭園に思いをかける辻氏に圧倒されました。

あっという間に予定時間である2時間が過ぎ、活発な質疑応答や意見交換もあり、大変有意義な研修会であったと思います。

その後、交流の会場を国際造園研究センターに移して、一部の研修会参加者も加わって、賑やかで楽しい四木会(毎月第四木曜日午後四時から行われる会員中心のサロン、親睦会)が遅くまで続きました。

(糸谷 正俊)



棚田の全景

通常総会

平成25年6月24日午後3時から、NSビルにおいて平成25年度通常総会を開催した。正会員59名の内過半数の44名の出席となり、本総会は成立し、服部理事長を議長として、提案された平成24年度事業報告および決算報告書、平成25年度事業計画案及び収支・支出予算案、定款の変更ならびに総会議決事項の委任は原案どおり可決された。総会終了後、前理事長の清水正之理事により、「大阪緑の都市計画の原点－大屋霊城の功績－」について講演があった。

編集後記

わがセンターでは昨年顧問の今里忠雄氏が亡くなられたのに続き、この3月には服部明世理事長、5月には梅澤清太理事を亡くし、時の不運を切に感じざるを得ません。再度この場で哀悼の意を表します。センターの事業方針として「故きを温ねて新しきを知る」の精神を掲げ、観る機会の稀な大徳寺「弧蓬庵」や山口「月の桂」の庭園を見学。大阪府の浜寺公園のアーカイブ整理や、大阪都市緑化フェアへの出展企画参加など、会員の方々や他団体、大学との協力の中で進めてきました。亡くなられた方々の意思を引き継ぎながら進めていきますのでこれまで以上、背中を押していただけるようお願いいたします。

◎ ご入会の案内

当センターは都市緑化への協力を努めながら、造園、園芸技術の研究、研修会の開催、自然と環境問題の調査、国際交流の推進などをテーマに活動しています。関心をお持ちの方、主旨にご賛同の方はぜひご参加下さい。

	入会金	年会費
個人正会員	10,000円	10,000円
団体正会員	50,000円	30,000円
賛助会員	30,000円	20,000円
友の会	免除	3,000円

◎ ご寄付のお願い

当センターの活動をさらに活性化させるため、広く皆さまのご支援を賜りたく、ご寄付をお願い申し上げます。

◎ ご寄付 301,532円 (みどりの箱寄付を含む)

◎ 新入会員のご紹介

個人正会員 二見恵美子 木田幸男
 団体正会員 株式会社 美交工業
 友の会会員 小林美代子 中谷善信 中村隆子

NPO法人 国際造園研究センター

〒540-0021 大阪市中央区大手通1-4-2 大手通第三ビル202号
 TEL/FAX : 06-6944-2040 http://www.klrs.org/

NPO法人 国際造園研究センター会報

No. 11
 2014
 6月発行

庭園見学 山口県 の庭園文化を尋ねて

枯山水の幻の名庭「月の桂の庭」 毛利氏庭園 / 常栄寺 雪舟庭

秋もたけなわに差し掛かる11月10日。久しぶりに京都を離れ、繁村誠人専務理事の案内で、山口県下での研修会となりました。

最初に訪れたのは、通称「月の桂」として著名な桂家(右田毛利家の家老職を世襲)の庭園です。枯山水に類別される庭園と云えなくはないが、通常の縮景タイプの庭園とは全く異なり、配石・石組は一切、様式を踏まえていません。二段重ねの石組が2箇所あり、その1つが南庭と東庭が重複する位置にL字型の大石を載せた石組となっていて、これがこの庭園全体を表象しているようです。旧暦の11月23日(新嘗祭の当日)、深夜に月(下弦の月)がこの大石の上(即ち南東の空)に昇る時刻に月を拝する催し(桂家代々の最も大事な行事)が行われるそうです。桂の樹は中国では「月中にある樹木」として重視されてきたという故事に基づき、月と桂(姓として名乗っている)との関係から桂家独自の神事(?)として継承してきたものと推察されます。こうしたことから、従来の庭園とは全く異なった自然観・宇宙観に基づいた空間であることには間違いないようですが、何故、石を重ねるデザインとなったのか、また他の石組・配



枯山水の幻の名庭「月の桂の庭」(防府市)



毛利氏庭園(防府市)

石との関係等、理解し難い点も多いです。ただ、近くの山の斜面には、屹立して露出した大きな岩が随所に見られ、中には、重ね合わせたような露岩も所々に見られることから、地域の風土特性を表象した空間であるとも云えそうです。

次は、毛利氏庭園です。明治から大正時代にかけて造営された大規模な池泉回遊式庭園です(約85ha、国指定名勝)。海(三田尻湾)を望む高台にあり、流れを導き、地形を活かし、巨木・巨石を多数配した実に豪快な庭園です。江戸時代の主だった大名庭園と同等程度の造りで、一定の評価は得られるでしょうが、明治・大正と云う時代背景や、地域の歴史、文化・風土特性との関連が物足りないです。また、借景となるエリアが、ほぼ市街地化し、海を望めないのも残念です。

常栄寺の庭園は室町時代の中期、雪舟の作と伝えられる極めて著名な庭園で



常栄寺 雪舟庭(山口市)

す。最初は、周防・長門の他、北九州を版図にしていた大大名の大内政弘の命により、その別荘として造営され(館は無く、庭園のみ)、これが後に常栄寺の所有となったものです。西の京「山口」を代表する庭園で、全国的にみて、極めて特殊な庭園です。枯山水のエリアと池泉のエリアからなる庭園ですが、主体はどちらでもない。と云って、双方が溶け込んでいるとは云えず、逆に違和感を生じてもないという絶妙のバランスを保っています。この理由は幾つか挙げられます。
 ①全域に渡って、配石の数が多く、かつ均一的、散在的に配置されていること
 ②池の護岸石組が目立たないこと③正面の滝石組以外、縮景等による具象的な石組等がほとんどないことです。加えて、方丈に面する枯山水のエリアでは、角張った石を「平天」にキッパリ据えた石組等、平天の石・石組が目立ち(一般的にはこの点が当庭園の特色とされている)ますが、これが枯山水エリアに留まらず、池中にも随所に見られます。こうした石の扱いが全域に拡がり感と統一感をもたらすとともに、訴求性の強い庭園になったものと思われます。
 ※「平天」…石の平らな面を上にして、テーブルのように据えること。

(吉田 昌弘)



苗木生産地 視察報告



視察日時：平成 26 年 2 月 19 日(水)

視察先：スギタ農園、古川庭樹園

大阪府八尾土木事務所 松崎 由利子

NPO国際造園研究センター理事繁村氏及び阪口氏(大阪造園土木株式会社)の計らいで、大阪府内の2か所の苗木生産地の見学及び生産者の声を聞かせていただくことができました。

スギタ農園 大阪府堺市美原区菅生 杉田 満氏

数か所に分かれた敷地に、それぞれの樹木の特性別に集約されて展示、育成されていた。全国の産地から取り寄せ、農園敷地内で展示、育成する樹木の卸売的な役割。

【最近の人気種】

ナワシログミ ギルドエッジ:斑入りで葉色が華やか、強い、街路樹向き
ハイノキ:シマトネリコに変わり、戸建の庭などに最近人気
ベニバナトキワマンサク:強い、花色が鮮やか、公園、街路樹にも向く
フェイジョア:実が食べられる。花も鮮やか。庭木に人気。



【水がめ】

荷直前にここに根株を十分浸すことで、出荷直前にここに根株を十分浸すことで、植栽地での活着に大きく差が出る。



【産地からの入荷状況】

この状態で入荷した苗を、農園敷地内に植え直し、仕立て直し、出荷できる状態に育成していく。



【仕立物】

1本数千円クラスの仕立物。最近中国からの受注が増えている。仕立物の仕立て前、仕立てはじめ。職人技。あまり見ることのできない姿。

古川庭樹園 大阪府南河内郡河南町馬谷 古川 元一氏

数か所に分かれた合計70,000㎡の敷地に各種の樹木を育成。馬谷圃場は、山そのものが圃場となっており、このあたりが良好な真砂土であるため、そのまま展示、育成地として管理されている。また、国内外への出荷も多く、特にセンペルセコイヤは日本有数。



【土壌改良】

ネニサンソ2号が有効。
パークは2年で効果がなくなってしまう。
ネニサンソのみで十分。



【展示方法】

地元の子どもの校外学習や、建築デザイナーなどの見学受け入れなどに積極的に取り組まれており、そのための樹名札や写真、特徴など様々な展示物にも力がそそがれている。

今回の2か所の見学は、府内にありながら、これまでほとんど見る事のなかった苗木の生産現場、生産者の声を知り、学ぶことができ、非常に貴重な体験であった。

樹木にも、やはりすたりはあり、また新品種もどんどん生み出され、さらに、様々な環境に適応した樹種の研究なども進んでいるものの、普段の仕事を進める上ではなかなか知ることができない。

たとえ、書籍や雑誌で興味をもったとしても、その特性などを最も知りうるのは生産者の方たちであるが、実際はその方たちの声を聞くことなく、十分な知識もないまま現場に導入し、枯れてしまうような失敗は多々見受けられる。

今回のように生で見せてもらい直に教えてもらうことは、新たな発見と現場に自信をもって生かすイメージを持つことができ、非常に有益であると思う。問題は、仕事としてなかなか来れないことであるが。

それにしても、予想通りではあるが、生産者の方々が、日々技術を培い、情報を入手し、トライアルを重ね、蓄積されているノウハウに、改めて感心させられた。

そして、大阪をもっと美しく、緑あふれる街にしたいという、私たちと共通の思いを持ち、生産者の立場で、若い建築家に緑化を促す勉強会を開催したり、地元の子どもたちに緑の大切さを学ぶ校外学習を積極的に行ったり、精力的に活動されていることは、今回の見学ではじめて知った。

遠方ならまだしも、府内にこのような優れた生産者の方たちがいるにも関わらず、ほとんど接点をもたずに公園づくり、街路樹管理をしていることを、改めて反省した。

事務が複雑化し、引きこもりがちな役所の技術職は、そこに埋没するのではなく、もっと現場に出て、体感し、センスを磨き、様々な立場の人と意見を交わし、時代の潮流に敏感になり、そこから次に進む方向性を見いだせるような人材になることこそが役所の技術者のあるべき姿ではないかと改めて感じている。

今回のNPO国際造園研究センターの企画と、快く見学、案内をしてくださったスギタ農園の杉田さん、古川庭樹園の古川さんに、心から感謝申し上げます。引き続き、若手にこのような機会があればと願っています。

記念講演会 清水正之氏「大阪緑の都市計画の原点—大屋霊城の功績—」から

大屋霊城氏は明治23年生。昭和9年6月に枚岡公園の奥の暗峠で急性盲腸炎を発症し45歳の若さでなくなっている。大正8年に内務省の出先、都市計画大阪地方委員会技師と大阪府技師(高等官6等)を兼務、詳細は清水氏が公園緑地に寄稿され、会場での配布資料「論客 大屋霊城—初代の緑の都市計画家 ランドスケープ研究 60(39)1997」を参照されたい。

以下は清水氏の講演から抜粋紹介する。

—時代背景を知る—当時、産業の急激な発展と共に大正デモクラシーといった闊達な大正期、大正14年には人口211万と東京を凌ぐ「大大阪」は、昔からの「水の都」を返上し「煙の都」と称されるに到っていた。当時、都市計画を欧米から学ぶ体制の中での自然公園提唱の田村剛氏に対して都市の市民の健康のための都市公園を提唱し、朝日新聞紙上で論戦を張った。日本の特異性を挙げ、「週末の家」を実践し、ハウードの田園都市論の問題点も指摘している。

オープンスペース、「自由空地」の発想命名は関一さんか？

昭和3年に開催された全国都市問題会議で座長を仕切った関一がその第1回のときに自由空地という言葉を使用している。彼というよりその当時の大阪市の考え方と考える。そのときに緑地計画の必要性も提起しており、自由空地が一人当たり30坪と、また当時大屋氏も公園の必要面積を試算提案していた。

箕面公園の野口英世の銅像も近くの旅館の女将が資金を提供。浜寺のテニスコートも南海と大阪毎日が寄付。住之江公園の開設式展示はビールは半額、電車賃も、という具合に。浜寺の海水浴場で花火を上げるなど、会場運営を含めて民間の資金が投入された。公園の植栽やトイレなどの設置や運営管理には公園内にあった料亭や別荘の地代を基金にして運用した。大阪の町は民間の資本や基金で作りに上げられたと言っても過言ではない。事実だ。こんな公園の計画やエピソード歴史も残して伝えていくことが公園を管理するものや来園者の方にも違った意味での愛着や地域の誇りに感じてもらえる。

大屋氏は、病気は歩けば直ると箕面で1里半の回遊園路を整備したが、評判悪く、「二度と山には来るな！」と落書した。オランダでは夕方になったら森に行く。ホテルに着いたら散歩に行く。ドイツでは一人ひとりが緑の中で散歩するというを生活習慣に取り入れており、特に5月1日はワンダーリングの日になっている(会場から本間さん)。わが国も少しづつそうなっているだろうか。期待したい。

さて、清水氏に見せてもらったスライドで、大屋氏の直筆原稿はセンター所蔵のものである。センターの本棚には清水氏の集められた大屋資料以外にも明治から戦前までのものが数多く存在する。まだまだお元気でいていただきたいのは皆様と同じ気持ちに変わりはない。今回の講演の内容だけでなく、これからは清水正之氏から戦後の生の話を直に聞く機会を是非もっていきたいと思う。

(繁村 誠人)



年齢を感じさせない記憶力とユーモアあふれる講演